

船団

第125号

特集

俳句はどのような詩か

[連載 エッセイ]

- 4 日本語ノート⑦区切り 森山卓郎
-
- 6 今日の川柳⑤魔法の言葉 芳賀博子
-
- 8 映画に恋して、俳句に恋して⑮女性の進出について 衛藤夏子

[評論]

- 48 芭蕉の近江、蕪村の京(2)―新都鄙問答 篠原 徹
-
- 66 時代と文脈から読み直す⑪
「第二芸術」?の桑原武夫? 鈴木ひさし

[書評]

- 84 朝日泥湖句集「エンドロール」 秋山 泰
-
- 86 藤野雅彦著「エピローグ」 波戸辺のはら
-
- 88 梨地ことこ著「鏡ハシル」 陽山道子
-
- 90 山本みち子句集「涙壺」 小西雅子
-
- 92 原ゆき句集「ひざしのことり」 谷さやん
-
- 94 小西昭夫の朗読句集「チンピラ」 東 英幸
-
- 96 坪内捻典歌集「雲の寄る日」 渡部ひとみ
-
- 98 小川弘子句集「We are here」 野本明子
-
- 100 千坂希妙句集「天真」 小枝恵美子
-
- 102 能城壇句集「カフェにて」 津田このみ

104 会員作品

- 138 今号の15句 火箱ひろ・芳野ヒロユキ・坪内稔典・小枝恵美子・鳥居真里子
-
- 143 エンジンルーム

表紙・カット/山本真也 レイアウト/松山たかし・阪脇幸夫



[特集]

俳句は どのような詩か

- 10 対談 俳句——発生から今日まで 井上泰至・坪内稔典
-
- 24 定型を引用するということ 林 桂
-
- 26 敗北と片言 青木亮人
-
- 28 俳句は「らしくない」詩 神野紗希
-
- 30 議論 俳句を考える 井上泰至・坪内稔典・会場の方々

[第12回船団賞]

- 76 受賞作 結婚せえへんか 山本真也
-
- 78 候補作 し・たたる 加藤綾那
-
- 虹 衛藤夏子
-
- 花のモーロク 平きみえ
-
- 81 選考にあたって 池田澄子・小西昭夫・ふけとしこ・火箱ひろ・坪内稔典

長谷川 博

すぽんと大根あんたとはこれつきり
おだてたりおだてられたりおでん酒
脳トレのタテヨコナメちゃんちゃんこ
ふわと持つふるまい酒の紙コップ
令和二年二月の二日ひた走る
ポンと肩たたかれヒョイと春の月
あっち向いてホイで横看向く冬帽子

波戸辺 のぼら

ちゃんちゃんこ元船長で詩人です
赤い服着たい気分だ冬青空
炊出しにセーターの袖たくしあげ
初夢のパンのあんこが飛び出して
誕生日いいえ白鳥見に行く日
春光や白い素焼きのプランター
春や春すっぴんのまま老いてゆく

火箱 ひろ

小春日を満喫すればお婆さん
放心の冬の金魚とスクワット
私たち無印良妻冬りんご
夜咄のとどのつまりのポルトガル
寒月光ヒトの卵が分裂中
梟の夜を広げてゆく羽音
百年後の冬へ青空あずけます

陽山 道子

おはようは二月の梢ほの明り
ふいに声かけられて二月のパセリ
パスイードときどき忘れ春三日月
山茶花の零れつづける島老いて
昭和昭和話したりない春の暮れ
春風は春のかたちにも暮れて
春昼の歪むガラス戸船は行く

●会員作品●

林 せり

地球滅しあと二〇〇秒ダイヤモンドダスト
産土の大きな山やダイヤモンドダスト
ほぐさねば思考の迷路わらび餅
混沌を形にすれば蕨餅
春泥や下取り祭の紅テント
イケメンの紅いチーフや春の泥
確かめん如月の黄を杖ついて

東 英幸

タピオカのぶつぶつ言っている小春
とろとろと落葉の中をついて行く
少しずつ息吐き溜めている冬木
噴水が凍るそれから私も凍る
人体の本を引き抜く雪催
断層に雪の凍み込む糸魚川
ブラインド上げて味わう春が来る

みぎわ せり

荒星よ宇宙の話老いの話
不採用通知素振りの先に春雷
春泥を掘ってこつんとアトランティス
ごみ屋敷となりの隣椿咲く
のんのんさま木蓮の芽のふくらんで
春空よ数字としての死者の数
黄蝶棲む四条通りや涙壺

藪ノ内 君代

ポジティブな大根ネガティブな言葉
ブローチはみずうみのいる冬木立
支持します冬青空のまるかじり
ふりむけば船団そして石路の花
船出する気分ぽつぽつ冬木の芽
さよならの語感どこかにふきのとう
日々という私の窓の猫柳

和田 芳明

秋晴れや世界に放電ノーベル賞
双六の上がりの後の散歩道
静かなる万葉のごと年明くる
誰も居ず節分前の元興寺
フルートに指先痛む冬の朝
擦れ違うマフラーの人美人かも
春隣オープンハウスの旗あまた

池田 澄子

肩甲骨寄せてゆるめて春よ春
寄居虫の手とおぼしきがさびしそう
ケサランパサランとも思われて春の夕べ
寝食を忘れず青虫を殺めず
寝付けずに春や明日は何着よう
蓬いま摘みごろならん枕かな
二人分三個の卵を割り初夏

木村 和也

北風吹いて水のきれいな日でありぬ
年の暮楽器の穴を吹いてみる
行く年や舟のかたちに鳥がいて
元朝の尿さらさらとこぼれけり
愛されて冬の鉛筆よく匂う
手を挙げて冬空をうつくしくする
秀麗なおでこが寄って梅三分

坪内 稔典

あんパンへ歩いていけるよ十二月
あんパンと孤独があつて窓は雪
あんパンは粒あん雪はぼたん雪
ぼたん雪あんパンだって寡黙だよ
あんパンがあつて牡丹の芽があつて
あんパンが連れ立っている梅日和
あんパンが呼んでるコブシ咲いている

●会員作品●

内田 美紗

ただいまとわたしに言つて日短か
雪ほたる歌舞伎座前に参集す
水ぐすりに昭和の甘さ紫荆
たんぽぽや赤ちやんの目の見えはじむ
連結音つづく余寒の操車場
つちふるや街頭ロケに首のぼす
啄木忌プルタブのなきパイナップ

榎並 しんさ

結婚は二度までは良しチューリップ
春だから結んで開いてもう一度
くちべにをとればまつしる雪おんな
新年会わらわぬ男ひとり来る
海を見る寝釈迦の形に肘をつき
初能や御婦人連は花摘みに
西は○○東は□□雑煮餅

中原 幸子

本の山いくつ崩れて春の風邪
道端のすみれと白いご飯好き
令和なるたつきの息吹夏の暁
清水湧くところわたしがまた一人
マスクしてヤツはななめに走る飛車
寒暁の「悲しき玩具」声にして
箸二本脚二本またお元日

野本 明子

雪になる耳の曲線の不思議
もうシクラメンし合ったりしてふたり
そうやって舟のかたちにみかん剥く
雪の日のどこも雪どこへ帰ろう
一月の妙な長さを猫通る
猫の尾っぽみたいにひとり春のくれ
黙つてたりもできる水ぬるんでる